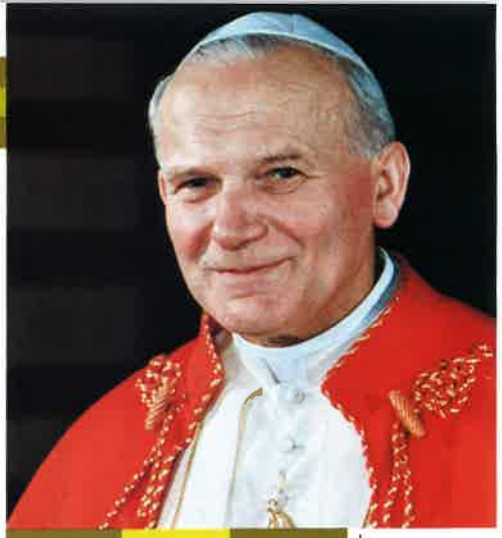
平成5年（1993年） 6月10日 教皇様の声 （昭和59年10月1日第三種郵便物認可）
6 JUNE,1993 毎月10日発行 第158号



# 教皇様の聲

# 聖体 教会生命の源

**1** 司祭的共同体としての教会の真理は秘跡を通して実現され、聖体において完成される、と第二バチカン公会議は教えています。信者は「キリスト教生活全体の泉であり頂点である聖体の犠牲に参加して、神的いけにえを神に捧げ、そのいけにえとともに自分自身をも捧げる。」（教会憲章11番）

**聖体は、キリスト教生活の泉です。**聖体にあずかることによって、真のキリスト信者として生きる動機と力を授かります。十字架上のキリストの犠牲（いけにえ）が、信者にキリストの寛大な愛の力を注ぎ込みます。聖体祭儀は、私たちのために犠牲となられた神の小羊の御体と御血で信者を養い、「その足跡を踏む」力を与えるのです。（Ⅰペトロ2・21参照）

**聖体はキリスト教生活全体の頂点でもあります。**信者は、祈り、仕事、喜び、苦しみの全てを聖体にゆだねます。このようなささやかな供え物が、キリストの完全な犠牲（いけにえ）と一つになり、神との親しい交わりにつながる完全な礼拝を通して余すところなく聖別され、神に捧げられます。（ヨハネ6・56～57参照） 聖トマス・アクイナスが言うように、聖体は「霊的生活の中心であり、すべての秘跡が目指す目的」（神学大全 III, q. 66, a.6）なのです。

**2** 「天使的博士」アクイナスは次のようにも述べています。「この秘跡の効果は神秘体（教会）を一つにすることである。それがなければ救いはない。救われるためには、少なくとも聖体にあずかる望みをもたねばならない。」（III, q. 73, a.1, arg. 2）これはキリスト教生活には聖体が不可欠であると言われたイエズスの言葉と一致します。「まことにまことに私は言う。人の子の肉を食べず、その血を飲まなければ、あなたたちの中には命がない。私の肉を食べ、私の血を飲む者は永遠の命を有し、終りの日にその人々を私は復活させる。」（ヨハネ6・53～54）

イエズスがお示しになったように、聖体は来たるべき復活のしるしなのですが、すでに今から、それは永遠の生命の源なのです。「永遠の命を有するであろう」とは言わず、「有している」と言われたとおりです。聖体という食物を通して、すでにキリストの永遠の生命が人間の生命に浸透し、流れ込んでいるのです。

**3** 聖体は、教会の各構成員が参加すべきものです。公会議によれば、「いけにえの奉献においても聖体拝領においても、無差別にではなく、それぞれ固有な方法で、典礼行為の中で自分自身の役割を果す」（教会憲章11番）ということです。

参加するということは、全ての「司祭的民」に共通の義務です。誰もがいけにえの奉献と聖体に結ばれることができます。しかし具体的な参加の仕方という点になると、教会の構成員一人ひとりに、固有の役割があります。職位的司祭の役務は特別ですが、それによって共通司祭職が排除されるのではなく、逆に促進されます。それは、キリストがその記念として聖体を祝うことを弟子たちにゆだねた時に計画された、特別の役割でした。そのためにキリストは叙階の秘跡を制定し、司教と司祭に（また祭壇の奉仕者としての助祭にも）権能を与えられたのです。（教会憲章11番）

**4** 職位的司祭職の目的は神の民を集めることです。その結果、「この民に属する全ての人が聖霊によって聖化され、『神に喜ばれる生きた聖なる供え物』（ローマ12・1）として自分を捧げる者」（司祭の役務と生活に関する教令、2番）となるのです。

前回述べたように、共通司祭職が霊的供え物を捧げることを目的とし、信者がそれを捧げることができるのは、信者が「聖霊によって聖化され」ているからです。キリストの十字架の犠牲に生命を与えたもう聖霊（ヘブライ9・14）は、信者の供え物にも生命を与えてくださいます。

**5** 霊的供え物は司祭の役務を通して実現可能となります。「信者の霊的供え物は、司祭の役務を通して、唯一の仲介者であるキリストの供え物との一致のうちに完成するものであり、このキリストの供え物は、主自身が来る時まで、司祭たちの手によって、全教会の名において、聖体祭儀において血を流すことなく秘跡的に捧げられる。」（司祭の役務と生活に関する教令、2番）

前回述べたとおり、洗礼と堅信によってキリスト信者は神への礼拝に「いわば職務により」参与する資格を得ています。その礼拝の中心、頂点は聖体に現存されるキリストのいけにえです。しかし聖体の奉献は、叙階された司祭を通して行われます。すなわちキリストの名において司祭が行う聖別によって奉献が実現するのです。

このような司祭の役務のおかげで普遍的司祭職が完成されます。これについて公会議は、聖アウグスチヌスの言葉を引用して次のように述べています。司祭の役務は「あがなわれた都の全体、すなわち聖者らの集会または社会が、普遍的な供え物として、われわれを偉大な頭の体とするよう、受難においてわれわれのために自分を捧げた大司祭によって、神に捧げられること（神の国、PL 41, 284）を目指している」（司祭の役務と生活に関する教令、2番）

**6** いけにえの奉献に続く聖体拝領は、「司祭職」を十分に発展させるため、とりわけ毎日の生活を通してすべてを供え物とするために必要な霊的力を信者に

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
© 1993

発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

与えます。「司祭は（…）信者たちがミサの供え物において父である神に神的供え物を奉献するよう、またこれと共に自分たちの生命の奉献をするよう教える。」（司祭の役務と生活に関する教令、5番）

聖体拝領はイエズスが最後の晩餐でお命じになった新しい愛の掟の実行をも可能にします。「私があなたたちを愛したように、あなたたちも互いに愛し合え。」（ヨハネ13・14、15・12）

**7** 聖体祭儀にあずかるとは、この一致を証言することです。公会議は次のように教えています。「聖体の集会においてキリストの体によって養われた信者は、この最も神聖なる秘跡が適切に示し、みごとに実現する神の民の一致を、具体的な方法で現す。」（教会憲章11番）

これは教会の信仰が聖パウロから受け継いだ真理です。「私たちが祝する祝聖の杯は、キリストの御血にあずかることではないか。私たちが裂くパンはキリストの御体にあずかることではないか。パンは一つであるから私たちは多数であっても一体である。」（Ⅰコリント10・16～17）というわけで、聖トマス・アクイナスは聖体を「神秘体の」一致（III, q. 72, a. 3）の秘跡と理解したのです。そこで教会と聖体に関するカテケージスの締め括りとして強調したいと思います。聖体が一致のしるしであれば、それは必ず信者に、家庭内で、また教会内でのより良い理解を保つために必要な相互の愛と和解、秘跡の力を与えるはずである、と。

（九二・四・八）

（教会シリーズ　13）

# 日曜日の説教をカテケージスのために

（福音宣教の中心手段となるのはつねに要理教育（カテケージス）です。子供や青少年のための体系的な要理教育はこれまでも行われてきましたし、多くの一般信徒が要理教育に携わり、家庭内でも子供たちへの手ほどきが熱心になされています。とは言え、若者・成人のための一層効果的な要理教育が今、切に求められていることを見逃すわけにはいきません。変りつつある世界の中で確かな信仰の基盤を得るため、またキリストの証人となるために、神のみことば・贖い主であるキリストの教えをしっかりと身に付ける必要があるのです。）

（…）さて、要理教育を充実させるには、成人の要理教育のためにもっと時間と努力と知識を注ぎ込まねばならないことは明らかです。そのためにあらゆる機会を捉えてこの目的を果そうとする司教の皆さんに、私から提案したいことがあります。「ことばの典礼」は要理教育の最高の手段です。日曜日の、また毎日のミサの説教の中で存分に活用してはどうでしょうか。日曜日や祝祭日に多くの人が聖体祭儀に参加する地域なら、やり方を工夫すれば、広範囲にわたる聖書の箇所を網羅した聖書朗読は、大変効果的な要理教育になります。朗読集やミサ典書は、いつの時代も興味深く親しみやすい手立てとして、人々が信仰を学び、はぐくむ上で、また良心の問題に対する答えを信仰の中に見い出す上で、よい助けとなるでしょう。司祭はぜひとも、こうした貴重な手立てを活用し、場面に応じた教えや適切なコメントを加えて、確固たるキリスト教的人格を育てるべきです。「聖書が教会で読まれるとき、キリスト自身が語る」（典礼憲章7番）のですから、キリストを常に教会の中に現存させている聖書の本文は、真理の光、恩寵の力として聞く者の心に入り込み、善を探し、善を行おうとする人を支える「旅路の糧」となります。

従って豊富な聖書朗読箇所を含む神の御言葉の朗読一覧表は、教区でも各教会共同体でも、万人のための要理ハンドブックとして大いに役立つことでしょう。（…）

# 科学者の尊厳と使命

**1** （…）科学の研究は、その専門的、技術的な応用と、伝統的な専門職、あるいは絶え間ない技術革新と共に必要になってきた職業における若者の訓練と共に、国内で、また外国との平和共存や協力を発展させるか否かを決める力となりつつあります。（…）皆さん、この点に関して教会には平和を守り、実現させようとする全ての人々の意欲と努力を支え、励ます使命があることをはっきり申し上げておきます。

平和のために何ができるか、何をすべきか、これについては、学問的・科学的知識の世界と教会との間に違いはありません。自然科学のある分野と、神学の知識のある分野は長らく分離されていて時には両者の間に対立や衝突が起りましたが、今日ではその対立もあらかた収まったようです。しかし、以前私がフライブルク大学で述べたように、「あたかもそれ自身で人間の根本的疑問をすべて解き明かすことが可能だと言わんばかりに、科学上の試みの自主完結性を主張してやまない科学者たちの掲げるイデオロギー」（Insegnamenti, vol. VII, 1, 1984, p. 1707）は、取り返しのつかない危険をはらんでいると思われます。教会は、ガリレオの以下のすばらしいコメントをもって答えます。「聖書も、自然の世界も、等しく神のみことばから生じた。前者は聖霊の指示によって、後者は神の命令を最も忠実に果すことによって。」（Opere, ediz. naz., V, p. 282, 30-35行）科学と信仰は、それぞれの固有の分野での互いの能力を尊重しつつ、一致することができます。

**2** 私たちは自然が神の手になるものと信じているだけではありません。聖パウロと共に、「神の不可見性すなわちその永遠の力と神性は、世の創造の時以来（…）見えるものである」（ローマ1・20）と信じています。しかし、科学知識の探求と実用化は研究者の探求心を駆り立て、数字や感覚で検証できる分野で真理を解釈しようとします。けれども、科学に身を捧げる人が、弱さや不注意、初めから拒絶する態度のためか、超越的絶対者の秘義と出会わないとしても、いつかは研究生活を通して人間の、また人間の起源と終着点、そしてその驚くべき強さと越えられぬ限界、信仰の光に照らされない限りその最たるもの、すなわち死という謎と神秘にぶつ

【教理書カセット・テープシリーズ】
★「祈り方」　★「神の現存」　フランシスコ・ルナ著
☆「十字架の道行」　☆「聖性を目指して」　☆「マリアを通してイエズスへ」　福者ホセマリア・エスクリバー著

# 説教・講話・書簡等の抄訳

各カセット一巻　税込定価二二〇〇円、送料三〇〇円（二巻以上は五〇〇円）
お申し込みは精道教育促進協会まで。

## 信仰の成熟と典礼

### イスパノ・モサラベ式典礼の復活によせて

（…）本日、私たちは祭壇を囲み、イスパノ・モサラベ式典礼で聖なる祭りを祝います。（…）

（イスパノ・モサラベ典礼とローマ典礼の）共通性を如実に示すのは、適切な文脈において解釈しなければなりませんが、セビリアの聖イシドロの言葉です。これはスペインの典礼の重要な特徴となっています。「神への捧げものを聖化するためのミサと祈りの方式は、最初に聖ペトロが決定し、全世界も同じ方式で捧げるようになった。」（De ecclesiasticis officiis, n. 15）

使徒行録1・1～11で、ルカは主のご昇天の秘義に関する重要な点をいくつか示しています。主イエズスは、聖霊を送り、弟子たちが世の終りまで主の証人となるために必要な力を与えようと約束なさいました。この場面は、旧約聖書の典型的な「神の顕現」のように描かれていますが、単に主のご生涯をしめくくる荘重なできごとと言うにとどまりません。使徒行録が伝える主のご昇天は、ナザレトのイエズスの時代から使徒たちと教会の時代への移行を画しています。ご昇天によって、人々の間での目に見える主の現存は終りを告げ、使徒たちの宣教が始まりました。聖霊に導かれ、支えられて、使徒たちは復活の証人、イエズスのみ言葉と約束の保持者として召され、あまねく全世界に及ぶ神の国を荘厳に宣言すべき者となりました。

主のご昇天の典礼は、すべてのキリスト信者に、成熟した深い信仰を求めるよう呼びかけます。主が約束された聖霊の来られるとき、来たるべき完成を目指すことができるように。「私が去るのはあなたたちにとって良いことである」とイエズスは言われました。「私が去らぬなら、あなたたちには弁護者が来ないからである。…だが、その方つまり真理の霊が来るとき、霊はあなたたちをあらゆる真理に導かれるであろう。」（ヨハネ16・7、13）　教会の一員であり、聖霊の賜を受けた私たちは、主が使徒たちに託された使命を続行するために呼ばれています。

主のご昇天に見られる教会と関連した局面は、やがて聖体祭儀のとき使われるさまざまな祈りの中で、特に強調されるようになりました。それらによると、ご昇天はキリストが御父のもとへ帰り、その右に座すこととして示されます。（黙示4・1～11参照）　私たちの贖いの秘義を新たに繰り返す典礼の聖なるしるしは、教会の歴史を通じて、ある意味で秘義を祝う人々の真の人間的・文化的価値に応じるものとなっています。

今日、私たちはここバチカンで、ご昇天のミサをイスパノ・モサラベ式として知られる典礼に従って祝います。

スペイン独自の典礼上の特色は、ローマ時代、西ゴート時代、そしてイスラム占領時代を通じて、東方教会やアンブロジオ教会のような地域の教会共同体とよく似たものでした。イベリア半島各地の人々がこの典礼様式の成立に関わっています。中でも特筆すべきはセビリアのイシドロ、イルデフォンソ、トレドのユリアノ、ウルエルのユストなど。この人々は、信者たちに合った典礼様式を通じて、自分たちの受け取ったキリスト教信仰を表したいという願いを抱いていました。その信仰をまずアリウス派の攻撃から、後にはイスラムの支配から守らなければならなかったのです。事実、イベリア半島の人々は使徒たちの伝えた信仰を受け入れ、時には殉教に至るまでに、人は自分自身と仲間たちについてよく知るようになりました。しかし人類の抱える大きな問題、存在の価値と目的に関わる難問は、科学的業績のレベルを越えて、より高度な見地に目を上げ、また文化的制限あるいは頑固な偏見を克服しないかぎり、解決することはできないでしょう。

宗教に関する研究の仕方には、いくぶん偏見があるようです。信仰の実践、福音が提示し、要求する道徳についても然りです。まるで信仰を真剣に取ることは、精神活動と思考過程の妨げになるかのようです。ここで、パスカルの「パンセ」から次の二句を思い起すのも無駄ではないでしょう。この偉大な科学者・宗教思想家は書いています。「私たちの尊厳は、ひとえに考えるということにある。頼るべきは思考のみであって、空間や時間ではない。私たちは時間や空間を満たすすべを知らない。だから、よく考えようではないか。これこそが道徳の基本である。」（Ed. Des Granges, n. 347）「さて、順序として、まず思考それ自身について、思考をお造りになった方について、何のため考えるかについて、考え始めるべきである。」（n. 146）

考える人間と創造主と人間の目的に対してふさわしい場を与えるなら、その考え方は正しいと言えますし、それが人間そのもの個々の人間の役に立つ方向に進むのであれば、その適用も正しいと言えます。普遍性という基準から見れば、現代科学が普及に一役買っている相互依存と連帯は、全世界にとって単に価値あるのみならず、必要不可欠なのです。（…）

（九二・五）

# 不変の教え

でそれを守り通しました。ごく初期の頃から、人々はキリスト教信仰の秘義を独自の典礼で祝ってきました。このように、スペインの典礼様式は、何世代にも渡る教父たち、司牧者たちが生涯を捧げて作り上げた教理の遺産から生み出されました。それは数多くの典礼書の中に、また地域住民の感受性や司牧上の必要に応じた霊性の中に示されています。

従ってこの古いイスパノ・モサラベ式典礼は、重要な教会的現実と文化を表しています。スペイン民衆のキリスト教精神を知る上で、忘れてはならないものです。今日私たちは、現在に至るまで、キリスト教生活の貴重な実りをもたらし続ける歴史的過去への、感謝を込めた賛美のしるしとして、聖ペトロの墓の近くで聖体の秘跡を祝います。私はローマ司教として、スペインの司教方や司祭、信徒の巡礼者の方々と共に、この典礼を行いたいと思います。諸問機関の指導のもと、ほぼ十年に及ぶ研究と調査の末に、イスパノ・モサラベ式典礼は当初の美をもってよみがえりました。

歴史をひもとけば、九世紀から十一世紀にかけて、ローマ教会の典礼がスペイン王国領の各地で取り入れられたことがわかります。トレド市のいくつかの共同体では、正式の許可を得て、イスパノ・モサラベ式典礼書に従って秘跡を執行していました。十六世紀、トレド大司教フランシスコ・ヒメネス・デ・シスネロス枢機卿は、モサラベ式典礼書の校訂と印刷を命じました。市の七つの教区、とりわけトレド司教座聖堂であるコルプス・クリスティ（主の御体）教会では、サラマンカの司教座聖堂と同様、モサラベ式典礼が現在まで保持されています。（…）

イスパノ・モサラベ式典礼によるミサは、権限を有する教会当局の定めた規定に従って行われますが、皆さんの祖先たちが持っていたキリスト教的霊性の重要な特質、スペインの宗教・文化・社会・政治上の発展を特徴づける性格を作り上げた特質をよみがえらせるための助けとなることでしょう。由緒あるイスパノ・モサラベ式典礼（祈りの規範）は、それを祝う人々（信仰の規範）のキリスト教信仰を強め、彼らの生活（生き方の規範）が、その昔、主と主の真理へのたゆまぬ奉仕という模範を与えた人々に優るとも劣らぬものとなるよう、助けてくれるでしょう。（…）（九二・五）

## ※モサラベ式典礼とは：

イスパノ・モサラベ式典礼とも言い、キリスト教初期の時代にスペインで発達したラテン典礼で、ゴート族やムーア人の支配下にあってローマ系住民の手で保持されていた。グレゴリオ七世の時代にアラゴンとカスティリアの王がローマ式典礼を採用したが、イスラム支配下のキリスト教徒（モサラベ）たちは昔ながらの典礼様式を伝えていた。国土回復後、古い典礼は公的には使用されなくなったが、トレドのいくつかの教区ではなお行われていた。

最近になって、スペイン首席司教・トレド大司教マルセロ・ゴンサレス・マルティン枢機卿の指導のもとに、専門家による委員会が典礼文を当初の形に戻し、昔の典礼文を復元した。現在、この典礼はトレドのほかスペインのどこでも、宗教上の目的あるいは歴史学・典礼学上の興味から要請があれば、使用することができる。

# 神の権利と人間の権利
## 十戒（2）

（前回に引き続き、教皇様は十戒の第二戒を取り上げ、創造主の御名への不敬が被造物、とりわけ人間の軽視につながることをお話しになった。）

★今回は「神の権利」とも呼ぶべきものについて考えてみたいと思います。あれこれの規定のもととなる事柄としてのみならず、「人間の権利」の基礎となり、それを保証するものとして捉えてみるつもりです。本日取り上げるのは十戒の第二戒に含まれる命令です。「神の名をみだりに呼ぶなかれ。」

神の御名は神秘に包まれた聖なる名で、尊崇と愛を要求します。

しかしこの点、不幸にもしばしば軽々しい態度や時には冒涜や不敬な見せ物、嘲弄、宗教心を深く傷つけるような出版物に至るまで、あなどりに近い態度が見受けられます。

良心の自由、意見や表現の自由を持つ権利は、大勢の信者の霊的体験に対する敬意と考慮までも免じるものでしょうか？

宗教心とは、人間の抱き得る最も貴重で力強いものではないのでしょうか？　公然と神に逆らう人は、道徳上重大な過ちを犯すのみならず、人が自らの宗教信仰を尊重される権利そのものを攻撃することになります。

★何よりも、神への不敬は人間に返ってきます。神秘への感覚をみがかぬ人は、感嘆する能力、耳を傾ける力、敬意を抱く能力を次第になくしてしまいます。そういう人はルールを無視し、際限もなく人々や物事を自分の意のままに操作する欲望にとらわれ、目をくらまされる場合が多くなります。

狂信におちいることなく神を敬うことは、人間への敬意を支える最強の保障です。被造物の尊厳は創造主の光に照らされて光輝を帯びるのです。人間一人ひとりの名前は、ある意味で神の御名を映しています。新しい「カトリック教会のカテキズム」が言うように、「神は各人を名指しでお呼びになった」(n.2158)のですから、「各各の人の名も聖別され」（同上）ており、神の愛を受け入れてその王国の担い手となった人々の中で永遠に輝き渡る（同n.2159参照）のです。

このことは、本日列聖の栄誉を得た二人の聖人によって、力強く証明されているのではないでしょうか。聖クローディン・テヴネとロス・アンデスの聖テレサは、人間の上に神から下る誉れの光が輝くことを教えてくれました。

兄弟姉妹の皆さん、神の聖なる御名へのうやうやしい尊崇の年をつちかい、救いの手立てとして大切に守りましょう。今日の世界が時に愚かな暴力と心をむしばむ不安に取りつかれたかのように見えるとしたら、それは神への祈りが人の心にも唇にも、めったにのぼらなくなっているからではないでしょうか。

★祝福された処女、比類なき教師から祈りと賛美を学びましょう。聖なる処女自身のものである、神の御名への敬愛を私たちにもお教えくださるよう願いましょう。共に申し上げましょう。「私の魂は主をあがめ、私の精神は救い主である神により喜びおどります。…全能者が私に偉大なことをされたからです。そのみ名は清く。」（ルカ1・46～49）

「教皇様の声」　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月十日発行　■定価　一部八十円　送料実費　■一年予約九百円　送料六百円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替
神戸
3-72393